

尼子四郎と夏目漱石

斎藤 晴恵*

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科

I. はじめに

国内の医学関連文献情報を検索する際、図書館員ならばまず、「医学中央雑誌」(以下、「医中誌」)を利用するだろう。「医中誌」は、現在インターネット上の医中誌検索サービスである「医中誌 Web」と年間累積版の冊子体の形態で提供されている。この起源は、明治36(1903)年、尼子四郎(図1)が国内医学文献抄録誌「医学中央雑誌」を創刊したことに始まる。これは、現存する医学関連文献二次資料としては、アメリカで1879年に創刊された「Index Medicus」に次ぐ世界で第二番目に古いものである。また、尼子四郎は、夏目漱石の「吾輩は猫である」の甘木先生のモデルといわれている^{1),2)}。

本稿では、「医中誌」の創始者である尼子四郎とはどのような人物であるのか、また、尼子四郎と夏目漱石にはどのような交流があったのかを明らかにする。

II. 尼子四郎(1865～1930.7.7.)



図1. 尼子四郎(「医学中央雑誌の歩み」²⁾より転載)

尼子四郎(以下、四郎)は、慶応元年(1865)、代々庄屋を勤める父、鉄三郎と母、喜和の二男として広島県山県郡戸内村本郷に生まれた。四郎の生家は、尼子一族の流れをくむという。尼子氏とは、室町、戦国時代に山陰地方を支配した近江源氏佐々木氏の一族である。佐々木高氏の孫、高久が近江国尼子郷で尼子氏を名のったことが始まりである。尼子経久が出雲の富田月山城を拠点に戦国大名として最盛期を築いた³⁾。

四郎は三人兄弟であったが、兄は夭折し、姉は広瀬家(母の生家)の幼女となった。明治維新後、家業の庄屋は没落し、母は四郎を出産後、産褥時に死亡した。このため、四郎は、伊藤家(父の妹の婚家先)で育てられた。四郎は、小学校入学前に儒医である越智研徳から学んだ。その後、現在の戸河内小学校の前身である明治8年創立の三生舎を卒業した。卒業後、広島で漢学を学んだ後、同郷の能美円乗が創設した開成社に入学した。開成社では漢学を梅園淳蔵から学んだほか、小学校の補習や英語教育をうけた。16～17歳頃は政治家志望であったが、能美円乗から医師になることを勧められ、岡山県医学校に入学したが、学資の事情により退学せざるをえなかったという。その後、明治16(1883)年、県費による医学生養成が行なわれていた広島県立広島医学校に入学した。四郎は、明治20(1887)年7月同校を首席で卒業し、順天堂医院や明々堂眼科医院(明治11年広島医学校校長であった須田哲造の医院)等で研修をした。

明治21(1888)年3月、東京帝国大学医科大学選科入学のため上京、青山内科に入局した。さらに病理学教室、佐々木内科、ベルツ教室でも学んだ。明治23(1890)年、腸チフスに罹って中退し、東京での勉学を支援していた島根県益田市在住の従兄、越智氏のもとで静養を兼ねて医院の仕事を手伝った。

四郎は、明治24(1891)年、旧津和野藩士を父にもつ中山豊子と結婚した。父、鉄三郎が死亡したため、郷里の広島県山県郡戸内村で医院を開業し成功したが、明治26(1893)年、山口県下松市に移転した。同年12月1日、長男、富士郎が生まれた。明治27(1894)年1月、四郎は腰椎カリエスに罹り、盛況であった医院の継承を断念した。その後病状は快方に向かい、軍医を志願したが不合格となり、広島医学校時代からの友人である富士川游に相談するため上京した。そして富士川宅に同居していた内国生命保険会社保険医の鼓四郎の紹介で、同年2月、同社の診察医に就職した。

四郎は東京で、広島医学校出身の富士川游、三宅良

*Harue SAITO : 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-3.
Saito-hr@tsurumi-u.ac.jp (2005年12月24日 受理)

一ら3名で丙甲社を結成し、芸備医学会をつくる準備を行った。明治29（1896）年、現在の広島医学会の前身である芸備医学会が創立されたが、その後2年間は、会長の呉秀三や幹事の富士川游、三宅良一が続いて渡欧し、あとから参加した藤岡慶次郎も山梨県病院長として東京を離れたため、四郎が責任者として活動した。学会誌「芸備医学」は、現在の「広島医学」の前身である。

明治36（1903）年、内国生命保険会社を退社し、谷中で開業した。そして数ヶ月後、千駄木へ尼子医院を移転した。同年3月、「医中誌」を創刊した。

四郎は、尼子医院での診療、芸備医学会の運営、「医中誌」の編集発行だけでなく、呉秀三の薦めで東京府巢鴨病院精神科医師も兼務し、臨床精神医学も研究した。大正2（1913）年、日本医師協会の創設にも関わった。さらに芸備協会、飽薇同好社、柏会、水曜会、愛染看護協会等の社会活動も行った。また、富士川游と共に「医談」、「杏林双書」、「人性」、「中外医事新報」、「日本内科全書」、「法爾」、「飽薇」などの出版活動も行った。

昭和5（1930）年7月7日、65歳で逝去した⁴⁾。

Ⅲ. 「医学中央雑誌」の創刊

国内では、明治時代から医学雑誌の刊行が始まり、四郎も芸備医学会代表として医学雑誌発行者の集いに参加していた。明治32（1899）年4月29日の集会で「医学雑誌原著総目録」の編纂が決議された。これは国内医学・薬学雑誌に掲載された原著論文の抄録であり、同年、年報として刊行された。同誌は、抄録作成の困難からその後索引誌に変更され、「日本医事雑誌索引」として明治

36（1903）年から大正10（1921）年の間に刊行された⁵⁾。

このように、刊行からわずか4年で抄録誌から索引誌へと変更を余儀なくされたという前例があったにもかかわらず、四郎は、久保猪之吉九州帝国大学耳鼻咽喉科教授の勧めで個人事業として抄録誌「医学中央雑誌」（「医中誌」）を明治36（1903）年3月25日、創刊した¹⁾（図2）。

「医中誌」創刊時の編集方針は、創刊号の「勸告」（図3）によると、①抄録誌、②網羅主義、③分担抄録、④速報性、⑤科目別分類、⑥海外原著論文紹介、⑦その他（学会記事、新薬紹介、医療機器紹介、新刊図書など）である。創刊号は収載誌64誌、収載文献1,886件である。発行頻度は月1回、100頁以上であること、前年度分は翌年1月号までに掲載できることを目標としており、速報性を重視していたといえる。



図3. 医学中央雑誌創刊号「謹告」
（『医学中央雑誌100年の歩み』¹⁾ p.16より転載）

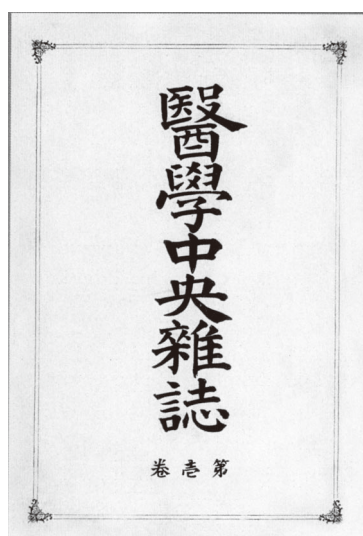


図2. 医学中央雑誌創刊号表紙
（『医学中央雑誌100年の歩み』¹⁾ p. 16より転載）

「医中誌」を発行する医学中央雑誌社は、創刊当時、東京市本郷区春木町南江堂支店内にあった。その後、十数年経ち、発行事務所を本郷区千駄木町50番地の四郎の自宅に移転する。大正10（1921）年頃の「医中誌」発行の様子を伝える当時の記録によれば、創刊されてから約20年が経過していたが、すべての事務が手作業で行われていた。その後流し込みゴム印、ナンバリング、初めて市販されたカード式宛名印刷、中古邦文タイプなどが順次使われるようになった。事務の人手も足らず、月2回の発送作業には、家中の者たちが糊付け作業を手伝い、郵便局への運搬は、例の「猫」のおじいさんの仕事であった⁶⁾。昭和3（1928）年、四郎が胃の手術を受け、同年、長男、富士郎が「医中誌」代表を継承した。

昭和20（1945）年1月28日、米軍による空襲で発行事務所と自宅を兼ねた医院が焼失し、富士郎の勤務する杉並区高井戸の浴風園舎宅に事務所を移転した。昭和34（1959）年3月、株式会社に組織を変更。昭和38（1963）年3月、事務所ならびに富士郎の自宅を現在地の杉並区高井戸東2-5-18に移転した。

富士郎は、昭和38（1963）年10月、「医中誌」発行の功績により、「紫綬褒章」を受章、昭和39（1964）年9月、任意団体に組織を変更した。昭和42（1967）年4月、「医中誌」刊行の功績により、日本科学技術情報センターより「丹波賞」を受賞、同年11月、日本医師会から医学文献功労者として、「最高優功賞」を受賞した。わが国の老年医学の父として知られ、その功績により「朝日賞」も受賞した富士郎は、昭和47（1972）年3月17日78歳で逝去した¹⁾。

富士郎の時代になっても「医中誌」の編集発行作業の方法は、創刊時と変わらなかったという。わが国で発行された医学関連領域（医学、薬学、歯科学、獣医学など）の雑誌や図書を購入し、論文、学会発表のすべてを読んで採択、非採択を決める。採択が決まると、科目別分類をする。抄録が必要なものは、抄録を作る。これらを編集し、校正し、索引語を指定する。富士郎は浴風園の院長としての仕事や、東京大学での老年医学の講義も行いながら、この「医中誌」発行の全ての工程を一人で確認し、とくに論文と学会発表の採否、科目別分類、最終校正においては全く一人で行っていたという。ゲラ刷りは印刷所から毎日数十ページ届くため、これらの校正に毎日数時間を要し、この日課は78歳で亡くなる直前まで続けられたという⁷⁾。

富士郎の死後、宏子夫人が理事長を代行し、昭和48（1973）年5月、村上元孝が理事長に就任。平成元年（1989）1月、村上元孝が逝去して篠原恒樹が理事長に就任。平成14（2002）年7月、特定非営利活動法人（NPO）医学中央雑誌刊行会を設立し、現在に至る¹⁾。

IV. 尼子四郎と漱石

尼子四郎が38歳で「医学中央雑誌」を刊行した明治36（1903）年3月頃、自宅を兼ねた「尼子医院」は、本郷区駒込千駄木町50番地にあった。同年3月3日、同じ町内の千駄木町57番地（現在の文京区向丘2-20-7）に英国留学から帰国した36歳の夏目漱石が転入する。漱石は同月、熊本第五高等学校を辞任し、第一高等学校および東京帝国大学の嘱託講師となった。そして同年4月、上田敏とともにラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の後

任の、東京帝国大学文科大学英文科初の日本人講師になる。しかし同年6月、神経衰弱が悪化。同年7月、さらに病状が悪化し、鏡子夫人と2ヵ月ほど別居する。明治37（1904）年2月、神経衰弱が再び悪化した。

同年11月、高浜虚子主宰の「山会」で朗読する文章として漱石は「猫伝」を執筆する。好評のため、高浜虚子が改題・補筆して発表することになり、「吾輩は猫である」は、高浜虚子が主宰する「ホトトギス」の明治38（1905）年1月号から明治39（1906）年8月号に掲載された。上巻、中巻は、それぞれ明治38（1905）年、39（1906）年に大倉書店から続いて出版され、漱石の家は“猫の家”として有名になった⁸⁾。この家に漱石は明治39（1906）年12月まで居住したが、漱石以前に明治23（1890）年10月から明治25（1892）年1月まで森鷗外が二人の弟たちと住み、千朶山房と名付け⁹⁾、「文づかひ」を執筆し、坪内逍遙と没理想論争を展開した¹⁰⁾。その後、堀辰雄の「聖家族」の母娘のモデルとなる大蔵省官吏片山貞次郎の妻広子と娘総子も住んだ時期がある¹¹⁾。

同じ町内に四郎と漱石は、約3年半の間住んでいた。尼子医院の患者は、山の手に拡がっており、千駄木町内では夏目漱石をはじめ、齋藤家、太田家、桂家、林町では高村光太郎もいた。弥生町の浅野家、分家の数々が茗荷谷まであり、往診には人力車で出かけた。浅野家からは、旧藩主の脈をとる医師の出身が広島県である事から、信用を得られたそうである。尼子医院の部屋の長押には、浅野長勲筆の扁額が上げてあったという⁶⁾。

四郎は、夏目家の家庭医であり、友人でもあった¹²⁾。画家中川一政は、長男富士郎とは本郷の誠之小学校の同級生であり、中川も、尼子家と漱石は友達だという¹³⁾。富士郎は、誠之小学校時代、東京高等師範学校附属中学校の入学試験に英語が課されていたため、漱石に英語の個人教授を受けていた^{7), 14), 15)}。誠之小学校は、尋常科4年、高等科4年から成るが、富士郎は、高等科2年で附属中学校に入学した。富士郎の誠之小学校尋常科卒業は、漱石が町内に転入してきた明治36（1903）年3月であり、附属中学校入学は、明治39（1906）年4月であるので、両家は漱石が千駄木に居た3年半の間に個人教授を頼むほどに近くなったと思われる。漱石から「富士郎君の出来が悪かった」とこぼされて、富士郎はほとんど困ったということだが^{7), 15)}、富士郎は東京高等師範学校附属中学校に入学後も学業成績極めて優秀であり、明治44（1911）年4月、第二高等学校三部医科入学、大正3（1914）年3月卒業。同年4月、東京

帝国大学医学部医学科入学、大正7（1918）年11月卒業。その後、東京帝国大学医学部法医学教室に入局し、稲田内科医局長となり将来を嘱望されたが、昭和元年（1926）、稲田教授の勧めで国内最大の養老施設財団法人浴風会医長に転身し、老年医学に貢献し、わが国老年医学の父とよばれた人物である¹⁷⁾。このことから、漱石と四郎にはユーモアのあるやりとりを交わす親しい関係があったことがうかがえよう。

さらに漱石夫人、夏目鏡子の「漱石の思い出」には、漱石の神経衰弱に悩まされた鏡子婦人が、漱石の病状について家庭医の四郎に相談したこと、そして四郎から四郎の旧知の友人である東京帝国大学医科大学教授兼巣鴨病院院長呉秀三を紹介され、漱石に診察を受けさせたことが記されている¹⁸⁾。巣鴨病院は、松沢病院の前身で、明治12（1879）年上野公園に開設された東京癲病院が、その後本郷、小石川区駕籠町に移転され、明治22（1889）年、東京府巣鴨病院と改称された。明治37年院長制となり、東京帝国大学医科大学の呉秀三教授が院長に就任した¹⁹⁾。

四郎は巣鴨病院精神科医師を兼務しており、千駄木時代から胃病をもつ漱石の診察をしたこと、精神医学の臨床を学ぶ立場からは、漱石の病状に高い関心をもつことなどは記述しているが、漱石のはっきりとした病名等については守秘義務を守っている¹²⁾。鏡子夫人の記述から、漱石の病跡研究が始まったとされるが²⁰⁾、漱石のカルテは現存せず、四郎による記述から漱石の病状がわずかにうかがえる。さらに、漱石の遺体の病理解剖が鏡子夫人の希望で東京大学病理学教室の長與又郎教授の執刀で行なわれ、長與教授による「夏目漱石剖検録」が現存する²¹⁾。

四郎と漱石には共通の友人として日本画家の結城素明がいた²²⁾。大正5（1916）年、四郎は素明から“野原に雀が二羽いる絵”を描いてもらった。そこで、素明のこともよく知っている漱石に、素明の絵に賛を書いてほしいと願ったところ、漱石は得意の漢詩を書いて与えた。

四郎は、漱石の家には、何か特別な用事があるから行くというのではなく足繁く通った。そのようなのんびりとした付き合いが二人の間に長くあったこと、漱石宅には、若い弟子たちが多く集っていたようだが、四郎のような年寄りとも漱石はずっと変わらぬ交流を続けたこと、世間を騒がせた漱石の博士号辞退事件などでも、二人は心を開いた会話を交わし、お互いを理解しあっていたことなどを回顧している¹²⁾。また、大正12年頃の尼子医院の様子について当時の書生が次のように記述して

いる。尼子医院には漱石筆の画帖、幅二点ほどがあった、虫干し時には、それらが螺鈿の唐櫃から取り出されて掛け並べられた、それらの品々を眺めながら、四郎が漱石の家へ往診した時の思い出を語った、また、二階の書棚には医学書以外にも文学書なども多くあり、漱石全集、日本古典文学全集、国訳漢文体系、音楽、ドイツ版の美術書などもあったことも、その書生が記述している⁶⁾。これらからも、四郎は医師でありながらも文学や音楽、美術などにも造詣が深く、漱石をはじめとする芸術家との交流があったことが理解できる。

現在、千駄木界隈に明治36（1903）年頃の様子を見出すことは難しい。漱石の家は、日本医科大学同窓会館前に文京区指定史跡として川端康成が題字を書いた石碑「夏目漱石旧居跡」が残り、石碑近くの塀の上に猫の像がある。漱石の住んだ千駄木の家は、昭和39（1964）年に明治村（愛知県犬山市）に夏目漱石旧居として移築保存され公開されている。

V. おわりに

夏目漱石研究においては、「吾輩は猫である」の登場人物、甘木先生のモデルは、漱石の家の近所の一介の開業医にすぎないとされてきた。漱石の死後、漱石の病状に関心をもつ研究者が現れ、漱石の神経衰弱を病跡学のテーマとして扱うようになった。そこで、呉秀三氏の診断が重要と捉えられるようになってきた。近年、医学中央雑誌刊行会のホームページや秦郁彦の研究から、甘木先生が尼子四郎であると知られるようになった。漱石研究の立場からは、尼子四郎は、開業医とはいっても抄録誌の作成もしていた学究的な人物でもあったという捉え方である。

明治36（1903）年に千駄木で知り合った偉業をなしたこの二人のことを識ったうえで「吾輩は猫である」を読み直してみると、「夏目家」を舞台に展開される小説の登場人物たちがより精彩を放っているように感じられる。

本稿の調査において、医学中央雑誌刊行会の篠原恒樹氏、松田真美氏には、貴重な資料のご提供ならびに転載のご許可をいただきましたことを深謝申し上げます。

文献・注

- 1) 医学中央雑誌刊行会創立100周年記念誌編集委員会. 医学中央雑誌100年の歩み. 東京:特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会:2003.p.25.
- 2) 医学中央雑誌刊行会. 医学中央雑誌のあゆみ.[internet]. <http://www.jamas.or.jp/> [accessed 2005-12-13]
- 3) 日本大百科全書1. 東京:小学館:1984.p.542.

- 4) 江川義夫, 尼子四郎: 廣島縣醫人傳. 第1集. 広島:江川義夫;1986.p.40-1.
 - 5) 宮野昌明. 医学中央雑誌の成り立ちとその概要. 医学図書館 1999;46(3):282-6.
 - 6) 近野駒次. 尼子先生を偲んで. 村上元孝, 関増爾編. 尼子富士郎. 東京:医学中央雑誌刊行会;1978.p.371-6.
 - 7) 篠原恒樹. 老年精神医学に貢献した人々第13回: 尼子富士郎: 我が国老年医学を生み育んだ偉人. 老年精神医学 1986;3(2):268-281.
 - 8) 平岡敏夫, 山形和美, 影山恒男. 夏目漱石事典. 東京:勉誠出版;2000.p.422-32.
 - 9) きたとしかた. スケッチ紀行漱石先生と歩く. 東京:日貿出版社;2000.p.139.
 - 10) 石崎等, 中山繁信. 夏目漱石博物館: その生涯と作品の舞台. (建築の絵本). 東京:彰国社;1985.p.24-7.
 - 11) 秦郁彦. 漱石文学のモデルたち. 東京:講談社;2004.p.146-7.
 - 12) 尼子四郎. 「猫」のモデル. 新小説1917;臨時號「文豪夏目漱石」:35-8.
 - 13) 中川一政. 私の履歴書. 日本経済新聞 1975年6月1日;朝刊.
 - 14) 鐘江栄行. 故尼子富士郎君の回想. 村上元孝, 関増爾編. 尼子富士郎. 東京:医学中央雑誌刊行会;1978.p.6-13.
 - 15) 篠原恒樹氏からの聞き取り (2005年12月14日, 医学中央雑誌刊行会にて) による. 尼子富士郎から「漱石から個人教授をしてもらい英語を教わったが, 漱石が父, 四郎に「出来が悪い」と言ったので, 大変弱りました。」と語ったという.
- なお, 個人教授の時期については, 中学校時代ともいわれる¹⁶⁾が, 桐々会 (明治20年附属中学校卒業の同窓会) の鐘江栄行が附属中学校の入学試験には例外的に英語があり, 志願者は速成勉強をしたが, 富士郎は父四郎の, 隣家の知友夏目漱石の指導で無事合格したと記している。漱石が千駄木に住んだ時期からも小学校時代とするのが妥当だと思われる。
- 16) 秦郁彦. 漱石文学のモデルたち. 東京:講談社;2004.p.157.
 - 17) 小澤利男. 随想老年医学7: 尼子富士郎: わが国老年医学の父. Geriatric Medicine 2005;43(2):359-62.
 - 18) 夏目鏡子. 漱石の思い出. 東京:改造社;1928.p.506.
 - 19) 石崎等, 中山繁信. 夏目漱石博物館: その生涯と作品の舞台. (建築の絵本). 東京:彰国社;1985.p.46.
 - 20) 平井富雄. 神経症夏目漱石. 東京:福武書店;1990.p.425.
 - 21) 長與又郎博士述. 夏目漱石氏剖検 (標本供覧). 夏目鏡子. 漱石の思い出. 東京:改造社;1928.p.470-84.
 - 22) 結城素明. 明治8(1875)年12月10日~昭和32(1957)年3月24日. 本名は結城貞松. 著書「東京美術家墓所誌」(1936)ほか. 明治24(1891)年, 16歳で川端玉章に入門. 明治25(1892)年, 17歳で東京美術学校 (現, 東京芸術大学) 日本画科入学. 明治30(1897)年, 卒業. 同年, 同校洋画科に再入学. 明治33 (1900) 年, 同校中退. 大正2 (1913) 年, 東京美術学校教授. 大正8 (1919) 年, 東京女子高等師範学校 (現, お茶の水女子大学) 教授兼任. 帝国美術院審査員. 帝国芸術院会員. 日本芸術院会員. 参考文献: 特別展結城素明-その人と芸術-. 東京:山種美術館;1985.p.114.

Shiro Amako and Soseki Natsume

Harue SAITO

Tsurumi University, School of Literature, Department of Library, Archival and Information Studies.
2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama 230-8501, Japan

Abstract: Dr. Shiro Amako began practicing medicine in Sendagi, Tokyo in 1903. In March of that year, he first published *Japana Centra Revuo Medicina* (known officially in Japan as *Igaku Chuo Zasshi* and colloquially as *Ichushi*). *Japana Centra Revuo Medicina* is the second oldest medical abstract publication currently in existence. The *Index Medicus*, first published in the United States in 1879, is the oldest. Dr. Amako is well-known in Japanese medical circles for his pioneering work that contributed so much to Japanese medicine. Soseki Natsume returned to Japan from an extended period of study in England in January 1903. In March 1903, he began living in Sendagi near Dr. Amako. Soseki (the author is generally known by his given name rather than his family

name in both Japan and the United States) launched his career as a novelist with *I Am A Cat* in 1905. This novel continues to be widely read in Japan and has been translated into many languages. One of the characters in *I Am A Cat* is Dr. Amaki. The fictional Dr. Amaki is said to be based on the real-life Dr. Amako. Recent scholars have placed increasing emphasis on this fact. Great achievement in both medicine and literature took place in Sendagi in the early years of the 20th century. There was a complex relationship between Soseki and Dr. Amako. Starting as a doctor/patient connection, it grew into a deep personal friendship involving not only the author and the doctor but members of their extended families as well. (*Igaku Toshokan* 2006;53(1):60-64)